

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

延安の娘

2002年・日本映画・120分

配給/連ユニバース、パンドラ

2003 (平成15) 年12月23日鑑賞
＜テアトル梅田＞

Data

監督：池谷薫

出演：何海霞（フー・ハイシア）／

王露成（ワン・ルーチョン）

／黄玉嶺（ホアン・ユーリン）

／趙国棟（チャオ・グオトン）

／王偉（ワン・ウェイ）／王

雄驥（ワン・シヨンジュー）

👁️👁️ みどころ

1966年から10年間にわたって展開された文化大革命と紅衛兵運動。そんな激動の時代、革命の聖地「延安」で生まれた一人の娘が、今、父親さがしの旅に。つくりモノではないホンモノの話だけがもつ迫力は圧巻。紅衛兵世代と同じ団塊の世代の私としても、考えさせられるところ大だ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ものすごいドキュメント映画>

この映画は長編ドキュメント映画で、当初、NHKのハイビジョンチャンネルのために製作されたもの。そして1990年以後、毎年のようにNHKスペシャル等で放映され、その回数は15回にのぼっている。

それを長編ドキュメント映画にまとめたのは池谷薫監督。彼は1989年の天安門事件以後、ひたすら中国を撮り続け、異様なまでの執念でタブーとされていた文革に挑み、この『延安の娘』を完成させたとのことだ。

音楽は、『あの子を探して』（99年）、『初恋のきた道』（00年）で張藝謀（チャン・イーモウ）監督と組んだ三宝（San-Bao）。2時間に及ぶ文革、紅衛兵、そして父娘再会を描くこの「ドキュメント映画」は、「真実」というものの圧倒的迫力を観客に見せつけてくれる。

<5つのキーワード>

この映画を理解し、またこの映画とのかかわりで、今の日本を考えるためには、最低限次の5つのキーワードを理解する必要がある。

①毛沢東（1893年～1976年）

この名前は誰でも知っているだろうが、今の若い世代には「歴史上の人物」となっているはず。しかし後述のとおり、私（1949年生まれ）たち団塊の世代にとっては、「生きた人物」だった。中国革命の指導者で革命第一世代の代表者。1949年10月1日の中華人民共和国建国の最大の功労者であり、死ぬまで中国共産党の国家主席をつとめた。

②文化大革命（プロレタリア文化大革命）

毛沢東が1966年に発動した大政治運動。

③紅衛兵

文化大革命の初期に学生たちが自発的に組織した大衆造反組織で、その中心は、主に10代半ばの中高生。「毛沢東語録」を手に、「造反有理」（造反には道理がある）を叫び、「反動分子」「反革命分子」たちを糾弾している姿は、全世界に報道された。

④「下放」政策

1968年、毛沢東の指令によって行われたもので、大量の都市労働者、学生などを農村に移住させた政治運動。

⑤「長征」「延安」

1931年以後開始された中日戦争と国共内戦の中、中国共産党軍が行った、江西省瑞金から陝西省延安まで総行程1万2千5百キロ（2万5千里長征）の大移動を指す。その強行軍と戦いの明け暮れの中、当初10万人兵力は1万人以下に激減したが、これによって中国共産党は抗日戦争の拠点を延安に築くことができた。以後延安は、「中国革命の聖地」と呼ばれている。

<ホンモノを語る登場人物たち>

この長編ドキュメント映画の主人公は、北京から下放された青年と娘との間に1972年に生まれた何海霞（フー・ハイシア）。

生まれてはならない子供として始末されようとしたが、彼女を取り上げた助産婦の手によって危うく命を助けられ、生後20日目に子供のいない農家に引き取られた。そして18歳の時、実の親が下放青年であることを知った。22歳で結婚し、翌年長男を出産し、生活の区切りがついたことにより、「親探し」の活動をはじめた。

彼女の親探しの旅は、延安に残っている元下放青年の訪問からスタートしたが、この何海霞の動きに応えたのが黄玉嶺（ホアン・ユーリン）。黄玉嶺はかつての下放青年、紅衛兵たちと順次連絡をとり、遂に父娘対面を果たすことになった。

何海霞の実の父親は王露成（ワン・ルーチョン）。今は北京で暮している。この3人の「主人公」を軸として、登場してくる人物たちが語るの、すべて真実。つくりモノでないドキュメントが持つ何ともいえない迫力が、それぞれの人物から伝わってくる。確実。

<「下放青年」は私の世代>

私の生まれは1949年だから、中華人民共和国の建国と同じ年。1967年3月に高校を卒業して、4月大阪大学に入学し、松山から大阪のアパートへ移り、1人暮らしをスタートさせ、直ちに学生運動に入っていった。この時代は文化大革命が開始された時期であり、学生運動の「セクト」の中には、「毛沢東主義」を名乗る一派もいたものだ。

何海霞の実の父親、王露成（ワン・ルーチョン）の生まれは1949年だから、私と同じ年。そして彼が北京から延安に下放されたのは1968年で19歳の時だから、これもちょうど私が大学に入り1人暮らしを始めた時と重なることになる。また、何海霞の父親探しの活動に協力し奔走する黄玉嶺は1950年生まれ。その他、この映画に登場する元下放青年たちは、皆私と同じ年代だ。

<日本の「年金改革」問題>

「小泉改革」の真つただ中による日本では、2003年12月の今、「年金改革」の議論が、(中途半端な形で)「決着」した。その内容は、「保険料率を現行の年収の13.58%から18.35%まで順次引き上げ、他方、給付水準を現役世代の平均的所得の50%(以上)で維持する」というものだが、これはあくまで数字合わせの処理。

問題の第1は、保険料を払おうとしない若い世代の存在。そして第2は、私たち団塊の世代が現役として働く期限が、あと10年に迫っていることだ。このまま進めば現行の年金制度が破綻してしまうことは目に見えている。このように、何かにつけて日本においては、私たち団塊の世代はその処理に頭を悩ませる存在となっている。

<団塊の世代>

他方、中国の「紅衛兵世代」はどうか？中国には、団塊の世代はないものの、それに相応する世代がまさに「下放青年」であり、元「紅衛兵」たちだ。「下放青年」は自分の意思で下放したのではないという意味では、時代の流れに奔走された犠牲者というべきだが、紅衛兵はそうではない。どこまで文化大革命の意義を理解し、毛沢東を信じていたかは別として、一応自分の意思で参加したものだ。しかしその紅衛兵運動や文化大革命は約10年後には完全に否定されたため、10代後半からこれに参加した若者たちは、その思想基盤を完全に奪われてしまったことになる。

その紅衛兵世代は、その後の改革開放政策にうまく乗り換えることなどできるはずはなく、改革開放政策を担う新たな世代の圧倒的なパワーと経済力の前に敗北していったのは当然のことだ。

1949年の建国から、文化大革命、そして改革開放政策へと進んだ新生中国の歩みの中で、彼ら紅衛兵世代が今をそして今後をいかに生きていくべきかというテーマを考えることはすごく重要だと思う。

<老紅軍の悲哀>

映画の中では、野外での麻雀卓を囲んで4人の老紅軍の言葉が語られる。老紅軍とは、かつて長征（1934年～1935年）に参加し、毛沢東の指揮のもとで長いゲリラ戦を戦った兵士たちのことだ。1930年代に15歳前後で兵士となった彼らは、今はほとんど死亡し、延安地区にもわずが十数名しか生存していないとのことだが、彼らの生々しい「証言」は大いに迫力がある。

長寿国となった日本には、まだまだこの世代の「生き残り」が多いはずだが、戦争の話が「風化」してしまった今の日本では、この老紅軍のような生々しい証言が聞けないのは残念だ。

<数々の賞を受賞>

この『延安の娘』は2002年に製作された。そして2002年カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭での、最優秀ドキュメンタリー映画賞等さまざまな賞を受賞した。また2002年ベルリン国際映画祭等多くの映画祭に正式招待された。

そしてパンフレットによると、2003年4月18日、香港の映画館でこの『延安の娘』を上映された時は、SARS騒動によって観光客が途絶えているにもかかわらず、劇場は多くの人々であふれ、大反響を呼んだとのことだ。

私は2003年12月23日（祝日）の天皇陛下70歳の誕生日にこの映画を観たが、年配者が多いものの、席はほとんど満パイ状態で、この映画の「強さ」を実感させられた。いつものことだが、こういう映画を多くの若者が観て、中国の戦後58年、そして日本の戦後58年を見つめる中で、「自分探しの旅」をしてもらいたいと思う。

2003（平成15）年12月24日記